

## 中国遼「契丹」における犬と人間との関係

——文化史的立場から——

潘 小 寧

### 要 旨

本論は、遼朝「契丹」(九〇七年～一二二五年)遊牧民をとりあげ、そこでの犬と人間との関係を文化史的にあきらかにすることを目的としている。遼朝は、中原においては、五代十国九〇七年～九六〇年から、宋朝九〇六年～一二七九年、金朝一一一五年～一二三四年まで含む時代にあたる。

遼朝を構成した契丹は遊牧民なので、遊牧動物の管理のために犬をもっている。それは、「契丹犬」とよばれる有能な犬である。遼朝時代において契丹人はどのような固有の犬に関わる習俗をもっていたのであろうか。とりわけ、それをこの論文の先行論文で分析した古代漢族との比較を視野に入れながら分析をする。容易に想像されるように、漢族は農耕民であるが、契丹は遊牧民であるので、契丹においては犬は、生活上不可欠であるので、犬と人間との関係がとても強い。分析の結果、以下のようなことがあきらかになった。

古代中国の漢族とおなじく契丹族も、犬は死者を守護するために必要であるとみなしていた。契丹族は伝統的なシャーマニズムと外来の仏教の両方影響を受けていたので、その信仰のもとで、犬を含む動物全般を崇拜の対象にしていた。祭祀のために国主は白犬を殺す習俗がある。ただ、犬の犠牲は古代漢族でもみられた。遼代の皇帝陵の鎮墓石に見られるようにそこに「石犬」がいる。そのような事実は契丹人と犬との強い関係性を示している。古代漢族でも犠牲にして埋葬した犬は主人を守ると信じられていた。いうまでもなく、契丹族は遊牧民族なので、犬は狩猟のために特有の能力を期待された。それは「遼代壁画」に犬と人間の日常生活が表現されてお

り、そこからも犬が契丹人にとって極めて大切な動物であることが分かる。また、壁画から遼代において、すでに犬は牧群をコントロールする役割をもっていたことが分かった。

このように契丹においては、犬は霊的な意味のみならず、と実用性の特徴があるといえる。

キーワード…契丹、文化史的、遊牧民族、犬

## 1 関心の所在

すでに執筆した筆者の類似のテーマの論文(「中国古代における犬と人間との関係」)は、中国古代(隋唐九〇七年まで)において、犬をどのようにイメージしていたのか、文化史的視点からその特徴をあきらかにすることを目的としたものであった。

その論文で、古代漢民族(少数民族も少し含む)は犬が人間とつぎのような特別な関係をもっていることを示した。つまり、「古代中国では悪霊(鬼)に対する脅威感が強く、それを防いでくれるものとして、犬に期待するところが大きかったといえる。

それを防げるだけの特殊能力を、人間は犬に期待したわけであり、それは犬というものは予知ができたり、正邪を判断できたりという人間にない能力をもっていると信じたことを根拠にしている。そしてなんといっても現実には犬が人間に忠実であることが、犬に大きく期待したことと関連性があるという事実を示した。

さらに具体的には、(1) 犬は人間に対して忠実な動物として、日本でも中国でも位置づけられている。(2) 犬は生者を守るためだけではなくて、死者をも守護すると考えられていた。(3) 犬は魔よけや厄除けとして信じられ、そのために犬を殺したり、ドアにその血を塗るということが行われた。古代で犬を殺したり、犬の血にマジカルな力があるという発想は、日本ではみられない。(4) 犬

には予兆能力がある。それは悪霊による異変をいち早く察知する能力のことである。(5) 犬には本物と偽物とを区別する能力がある。(6) 犬は水とのつよい関連性がある。これは日本にもみられる信仰であるが、中国固有の考え方として、水が地下の世界に通じているので、水脈を経て地下の世界を察知する能力があるというものである。このようなことを前論文では示した。

それを受けて、今回の論文は唐の次の時代の北方に位置する非漢王朝、遼朝「契丹」(九〇七年―一二五年)をとりあげる。そして前論文である古代の漢族と比較して、この遼朝は人間と犬との関係においてどのような差異をもつのかをあきらかにすることを目的とする。

遼朝は、中原においては、五代十国九〇七年―九六〇年から、宋朝九六〇年―一二七九年、金朝一一一五年―一二三四年まで含む時代にあたる。

契丹は遊牧民族なので、遊牧動物の管理のために犬をもっており、それは、「契丹犬」とよばれる有能な犬である。史料や遺物から見ると、遼朝時代において契丹人は特別な習俗「石犬鎮墓」を行っており、主人と他の動物を守り、他方、妖怪からの魔よけや厄除け、霊物、神霊を浄化するものとしてという宗教的とも言える機能と、猟犬、牧羊犬などの実用的な機能をもっていると思われる。それを以下で具体的に検討することにする。

## 2 契丹人の宗教と信仰

### 契丹人信仰の中心を占めるシャーマニズム

契丹人(族)にとって、仏教は優遇された宗教であった。けれども、北方ユーラシアの他の遊牧狩猟民と同じように、もともとの土俗信仰が力をもっていた。この土俗の信仰はシャーマンを中心にしたものである。中国語で「巫の信仰」といわれているものをここではシャーマンの信仰ということにする。シャーマンの信仰は契丹人の精神面の多くを占めている。たとえば、日常生活で説明できない

ような現象が生じると、必ずシャーマンの助言を求めることになる。

島田の指摘によると「シャーマニズムというのは、シャンマン（シャーマン）が主要な役割を演ずる宗教形態であるが、その特色はシャーマンが直接超自然界と交通し、常と異なる精神状態となり、神自身となって、神語を語り、託宣を行う点にあるといえる。もちろんそれ自体異常なものには違いないが、それが宗教的民俗となり得たのは、原始人は超自然的な異常な出来事と己の将来とを結合して考えるに急なためであると考えられる。シャンマンの機能には、呪術的機能・司祭的機能および呪医的機能の三つがあり、その分化は完全でない。原始人自身は、常に超人間的な霊の存在を信じ、宇宙の森羅万象をすべて神の創造と考えて、自然界・人間界のあらゆる出来事も、すべて神の摂理と信ずる敬虔な人々であったから、すべての行動に先立って神意を知ろうとする。したがって神霊と人との媒介者としての機能を果し得るシャンマンが、人々の尊敬をあつめたと推測できる」（島田、二〇一四年、九二頁）という状態であった。

梁娜の論文「浅談契丹之犬」では、契丹が行っていた「陵前立犬の墓儀」の習慣はシャーマンの祭祀から徐々に進化してきたと指摘した上でつぎのようにいう。その要旨を紹介すると「シャーマンは神と人間との媒介とみなされていて、シャーマニズムは固有の思考法則と神霊観を具えている。たとえばシャーマニズムにおいては動物に対してそれを神霊として崇める。それにしたがって、契丹人の間では、人間は死後の世界で生活が続けるという考え方から、犬は「辟邪趨吉」（邪を避け、吉を生み出す）の機能があつて、それゆえ、契丹人は死者を犬と一緒に埋葬すると、生前のように犬に主人を守ってもらえると考えたのだ」（梁娜、二〇一〇年、九九―一〇〇頁）という。

この考え方は拙稿（潘、二〇一七年）でみた「中国古代」（漢民族）の人たちと同じである。ただ、梁娜はこのような考え方は、犬が常に牧人を見守るとともに、家畜の群れを保護するという事実から生じるのだと解釈している。

## 仏教の影響

仏教は漢民族の文化から影響をうけて契丹に入った。そしてシャーマニズムに比肩するほどの宗教的影響があると思われるので、こ

こで少しばかりその状況を述べておくことにする。

吉田一彦の指摘によると「アジア東部における仏教文化の展開を考察する上で、近年あらためて注目されているのが契丹（遼）の仏教である。契丹では、多くの寺院・仏塔が建立され、歴代の皇帝たちが仏教を信奉し、契丹大藏経が作成されるなど、華やかな仏教化が栄えた」（吉田一彦、二〇一三年、五二頁）。

また山根弓果の論文では、「太宗は遼朝の最高儀礼である祭天地の場所、木葉山に、白衣観音像を安置する廟を設け、木葉山神に拝謁する前にその菩薩堂に詣でる儀を増やしている。契丹古来の習俗信仰と仏教信仰とを同格に扱っているといえるだろう」（山根、二〇一一年、五一頁）と仏教信仰と契丹古来の習俗信仰（シャーマニズム）とが同格であると指摘している。

さらにいう。「儀礼が漢人の儀礼に即して整備されたことから窺えるように、漢人の制度が参考にされた。もともと漢人が信仰する仏教に対しても、遼皇帝自らが崇敬する態度を示して厚い寄進を行うことによって、皇帝の絶対的権力の顕示を狙ったものである可能性もある」（山根、二〇一一年、五一頁）。

このように契丹族も漢民族の思想の影響を受けて、国の制度や信仰を変形させてきたのは事実である。それにもかかわらず、契丹本来の信仰は根強く機能していた。そのことを山根は今井の論考を引用しながら指摘している。すなわち、「今井氏は、遼史本紀にみえる祭天十三条・祭天地五十五条の記事を提示され、各記事の内容を祭天は皇帝が狩猟を行ったさい、その獲物を天に捧げたというのが多く、かたや祭天地は青牛白馬などの犠牲が供えられたことから、祭天は簡易な儀式で祭天地は格式ばった祭天儀式であったと推察し、農耕政策の推進と祭天地を関連付けて考察されているが、筆者はその年月日と事由に着目して『遼史』からその記述を抜き出し、さらに遼代の祭祀を時系列的に抽出した」（山根、二〇一一年、五二頁）。

このように仏教と契丹本来の信仰とは相互に拮抗してきた面は否定できないものの、仏教の影響は無視できない程度になってきた。その事実を島田は以下のように指摘している。

すなわち「この国〔契丹〕の仏教は、北方仏教の系統に属し、特に真言宗と陀羅尼信仰とが支配的であった。太祖の世代には、中国から仏僧を招き、龍化州に開教寺や大広寺を、また上京に天龍寺などの寺院を建立し、太宗や世宗の世代には、多くの中国僧が主とし

て上京などで盛んに布教活動をし、やがて聖・興・道の三代になると、仏教の最盛期を招来するまでになった。寺院や仏塔が五京はじめ国内いたるところに建立され、仏典の刊行も行われ、多くの名僧知識が輩出し、日本藏経にも深い影響をもつ、いわゆる契丹大藏経の雕印や、房山雲居寺の石刻大藏経の続刻も進められた。それにつれて民間の仏教熱も高まりはしたが、もともとシャマニズムに陶醉したかれらは、千人邑などの講をつくって仏事に従ったり、寺院の維持をはかったりし、四月八日の釈尊誕生会には、官民僧尼をあげて楽しく一日を過したりしたから、寺院は信仰の中心となっただけではなく、それよりもむしろ一般庶民の交歓の地、遊楽の場所として利用された。それによって、かれらは容易に法悦の境地にひたることでできるようになっていたのである。(中略)しかし、道宗が晩年仏教を狂信するあまり、やたらにこれちなんだ行事を設けて国政をかえりみなくなり、国家の保護におもねた僧尼の頽廢を招いたばかりでなく、狂信のあまり生物の屠殺を禁じたり、狩猟に制限を設けるなど、契丹人の生活を脅かすまでに及んで、弊害も著しいものがあるようになった」(島田、二〇一四年、九六―九七頁)という。

### 3 占星に犬が登場する

#### 天から狗が落ちてきた

『契丹国志』にはつぎのようにいう。すなわち「初、女真入攻前後多見天象、或白氣經天、或白虹貫日、或天狗夜墜、或彗掃西南、赤氣滿空、遼兵輒敗。是夕、有赤若火、先自東起、往來紛紛亂、移時而散。軍中以為凶兆、皆无闕志」(『契丹国志』、卷十、天祚皇帝上、天慶八年春正月条、一五七頁)。

この古文中国語を日本語訳すると、「女真族が攻め込んだころに、天体の現象がたくさんが見られた。白い気が天を通り過ぎ、白い虹が太陽を貫く。また、夜に天狗が落ちてきた。あるいは、彗星が西南に走った。そのとき赤い気が空滿ち、遼軍は敗退する。夜になると、火の光のような赤気が生まれ、辺りが大混乱して、しばらくしてから消えた。軍中はそれを凶兆と思い、兵士たちの戦う意欲が萎えた」。



このように、天から大きな音を立てて、隕石が落ちて来ることを犬になぞらえて、天狗と呼ぶことだ。それは、異変の予兆と見なしたのである。

齊建芝はこのことをつぎのように説明している。「天象的怪異現象対遼代契丹族而言、同様預示着将要發生的事物的凶吉。在諸多天象中、被契丹人視為兆象的主要有氣的变化、客星の出現以及流星の墜落等」（齊建芝、二〇一七年、二三頁）。

これを日本語訳すると、「遼代の契丹族について言えば、天体の怪異現象もまた（他の怪異現象と）同様に、これから起ころうとしている出来事の凶吉を暗示するものであった。契丹人が予兆現象と見なしていたのは天体現象の中で、氣の変化、新星や彗星の出現、及び流星の墜落など」。また、齊建芝は上の『契丹国志』の記事をもとに契丹人が流星の墜落を凶兆と見なしていたことを指摘する。

『史記』には、「天狗、状如大奔星、有聲、其下止地、類狗。所墮及、望及之如火光炎炎衝天。其下衝如數頃田處、上兇者則有黃色、千里破軍殺將」（『史記』、卷二十七、天官書、一三三五頁）とある。これを日本語訳にすると「天狗星の形状は大きな流星のようである。上からとがって地上にとどまると狗のようである。落下するところを望むと火柱のようで炎炎として天をつく。その下は円形で數頃の田ほどの広さだ。上は鋭くとがり黄色い。それが現れるとその下の国では千里にわたって、敗軍のことがあり、將が殺されたとする」（『史記』、訳注本、一九五頁）ということである。

#### 4 動物にかかわる年中行事

##### 白犬を埋める

犬そのものの分析に入る前に、契丹の動物に関わる年中行事を紹介する。

「新年の始め、契丹人はシャマンを招いて、帳幕の周辺をめぐり、鈴を振り箭を放つ所作に家人もこれに和し、のち帳幕に入つて炉に塩をくべ地拍鼠を焼いて、邪をはらう行事を行った。朝廷では、師巫十二人にこの行事を行わせ、また、糯米を炊き白羊の髓と混じて団子としたものを、君臣ともに食すこととされていた」（島田、二〇一四年、一三〇頁）。

そして、さらに「二月一日を中和節とするのは中国の習いであり、人民に穀物百果の種を与え、順風慈雨と害虫の駆除を祈る行事とされた」。そして三月には「三月三日を上巳とするのは（中略）契丹でも上巳を節日として受けてはいるが、木で兔をつくり、組を分けて乗馬し、これを射る行事が行われた。木兔を射差てた組が勝者であり、敗れた組は下馬して酒を進め、勝った組は乗馬のままこれを飲んだという。国語解にこの行事を『陶里樺』といい、陶里とは兔の意、樺とは射の意とされる。この行事も避邪の意を寓したものに違いない」（島田、二〇一四年、一三〇頁）。

また秋になると、「中秋。八月八日、白犬を帳幕前七歩にその口だけを現して埋め、七日夜すなわち一五日を中秋として、白犬を埋めたところ帳幕を移すという行事が行われたという。国語解では、これを捏褐耐といい、捏褐は『犬』、耐は『首』の意とされる。（中略）重九。九月九日、皇帝は群臣を率いて虎狩を催し、のち高地に帳幕を設け、群とともに兔肝と鹿舌でデイ禰をつくり、宴飲を行い、さらに酒を帳幕の入口に注いで、避邪を行うと伝えられる」（島田、二〇一四年、一三二頁）。

冬には「冬至。白羊・白馬・白雁の血をとって酒と混ぜ、これを飲んで避邪に寓する。（中略）臘月。十二月八日を臘日とするのも、中国の節日に倣ったものであるが、この日、契丹では皇帝が群臣を率いて卷狩を催し、獲物を供えて天地を祭り、清を行ったのち、群臣とともに宴飲するとされていた。」（島田、二〇一四年、一三二頁）と述べている。

### 人間世界の妖魔を慰めるための犬

また齊建芝の論文では、「契丹族先民在遠古时期曾靠采集野果和獵取動物求得生存，不過我国北方广大地区由于氣候温差大，使得采集业带有季節性，这就使得狩獵業成了契丹先民獲取生活的最重要手段。後來，契丹人逐漸學會了放牧牲畜，但狩獵仍然是他們獲取生活資料的重要方式，所以，契丹人自始至終對野生動物都有一種依賴感。他們把這種依賴感不自覺地又轉化成了對野生動物的崇拜。（中略）遼代契丹人認為狗也有神性。狗對契丹人來說，是門護帳，放牧，狩獵的重要幫手。每逢八月八日，國主殺白犬于寢帳前七步，埋其頭，露其嘴。後七日，移寢帳于埋狗頭上。契丹人這樣做的目的是，或者用犧牲來的慰藉地上的妖魔，或者把犧牲本身的靈魂變為庇護的鬼神」（齊建芝、二〇一七年、一六頁）。



すなわち、この文章は日本語にすると、「契丹族の先祖は遠古時代では、野果〔野菜や果実〕の採集や狩猟などで生きていた。しかしながら、中国の北方地域は気候の温暖差が大きいので、野果の収穫作業には季節性があつて収穫できない季節もあつた。そのため、狩猟は契丹の先祖にとっては、生活のための最も大切な手段であつた。その後、次第に牧畜などもするようになったが、それでも狩猟の重要性は変わらなかった。したがって、契丹人は始終野性動物に一種の依存感をもっていた。この依存感からは無意識のうちに、野生動物を崇拜することになった。（中略）遼代契丹人は犬にも神性があるとかんがえた。契丹人にとって、犬は門番、放牧、狩猟の重要な助手だった。そして八月八日になると、祭祀のために国主は白犬を殺して、寝帳の前七歩の場所に口先だけ地面の上に出るようにして、その頭部を埋める。さらにその一週間後、寝帳を犬の上にも移動したが、その目的は犬を犠牲にすることで人間世界の妖魔を慰めるため、あるいは犠牲になった犬が霊魂となって、鬼神から人間を守るためだ」と述べている。

## 5 実生活の中の犬の位置

### 獵犬・恩犬としての犬

獵犬は契丹人に必要不可欠なものである。獵犬は主人に忠実で、馬鞍の前後につねにいて、忠誠をつくす。草原でも森の中でも、獵犬は野獸を追いかける。獵犬は遊牧民族特有な文化であるといえよう。

蓋山林が「犬岩画・犬・犬祭」の論文で指摘していることだが、中国遼朝の考古学の遺存の中で、岩や崖に刻まれた絵は重要な位置を占めている。岩絵は古代中国の各民族の物質生活を明らかに示している。古代社会の経済と文化生活のたくさんの方面にも応用できると、蓋山林は言っている。

たとえば、岩絵に描かれている犬は、図1にみるように、主人（人間）のすぐ近くにいて、動物たちを管理していることが分かる。トレーニングされた犬は、性格が勇敢、動作が機敏、頭の回転は早い。そのため、古代の遊牧民族は犬を大切にする。犬の特性から見れば、犬は視覚と聴覚と嗅覚が特別に鋭敏で、利口であり、人間からのトレーニングを受け入れやすい。獵犬のこの特性は人との密



図1 狩獵 出典：「犬岩画・犬・犬祭」p.59

接な関係を決定づけた。

狩獵の時代、獵師は狩りをして動物を捕らえる。そのためには犬の助けが必要だ。犬は食事や住むところで人間の恩賞に頼る。犬は嗅覚がとても敏感だから、獣類の残した痕跡や匂いから、自分の進む方向を見分けられる。獵犬は獲物に出会って後、早く獲物を視野に入れて、獲物に付きまとい、獲物を逃がさない。犬は小型の動物を追うことができる。たとえば野兎など。

獵犬はまた恩犬でもあると蓋山林が言っている。獵師が道に迷った時には、獵犬は帰り道をリードすることができる。獵師がケガをしたときには、獵犬はご主人様を忠実に守れる。そのため、獵師はよく「獵犬は自分の忠実な助手だ」と言う。その時代、契丹人は狩獵をするときに、弓矢、刀剣、矛銃、棍棒、チェーンハンマーなどの用具を使用し、それ以外に、また鞍馬、鷹鷂、を使用する。また別に、獵犬がとても強い頼りとなり、獵犬は狩りにおける重要な役割を発揮しているといっている。

『遼史』には獵犬の記載が多い。たとえば興宗耶律宗重熙二十三年（一〇五三）九月庚寅には、「獵、遇三虎、縱犬獲之」『遼史』、卷二〇、興宗本紀三、二四七頁）とする。

この史料の語るところによると、皇帝が自ら参加して大規模の狩りをしている。そのとき三匹の虎を獲獵することができた。三匹の虎は群の犬に囲まれている。三虎を得ることができるのは、獵犬の貢献で、この絵ではその時の格闘シーンの激しさを物語っている。結局、三匹の虎は傷ついて、抵抗する力を失って、最終的に虎は捕獲される。この場面から獵犬が十分な貢献をしているのが分かる。

夏宇旭の論文ではつぎのような指摘がある。すなわち、契丹人の狩獵についてはファルコン海東青（鷹の種類）が注目されている。獵犬は契丹人にとって狩獵生活に欠かせないツールである。実は契丹犬は大きくない。しかし、爆発力が強く、動作が機敏、速度が



図2 動物群と氈車 出典：梁娜「浅談契丹之犬」p. 95

目覚ましくて、すごく獐猛だ。普段は衛守としての役割をし、狩猟時はご主人と一緒に出かける。そして獣を追いかける。そういうこともあって、契丹人は獵犬の品種の選択と馴養を非常に重視している。獵犬は契丹人狩猟の生活の中で大切な重要性がある。獵犬は契丹人にとって、遊牧民族として、特別な民族文化を体現しているといえる。

### 見守る犬としての番犬

蓋山林はさらにつきのようにも言っている。「犬は家や家畜を守る。また、いつでもどこでも人間を守る。狩猟のときもそうだし、牧民はいつでも犬と一緒にいる。」（蓋山林、一九八九年、六〇頁）

梁娜の論文「浅談契丹之犬」にも、「喀喇沁旗娄子店1号墓木石西壁面のところで、一台の車轆、高い車輪の氈車があって、車画面の後半部分は家畜群、家畜群の前は馬群。後半に羊の群れがついている。羊の群れの先には犬がいる。この犬は体がつしりしている。しっぽを巻いて上昇している。このように、契丹人は犬が氈車を守って、牧群を看護している」（梁娜、二〇一〇年、九六頁）と指摘している。

### 6 鎮墓石犬

契丹人は墓の中に石犬を入れる習慣がある。

梁娜は遼祖陵（遼太祖の陵墓）についてつぎのように指摘する。原文は次の通り。「遼代第一個皇帝耶律阿保机及其皇后陵寢2003年试掘时在陵前的緩坡上發現一尊石人像及一尊石雕卧犬。石人的頭部残缺，立于石犬旁，应應専門負責管理該犬

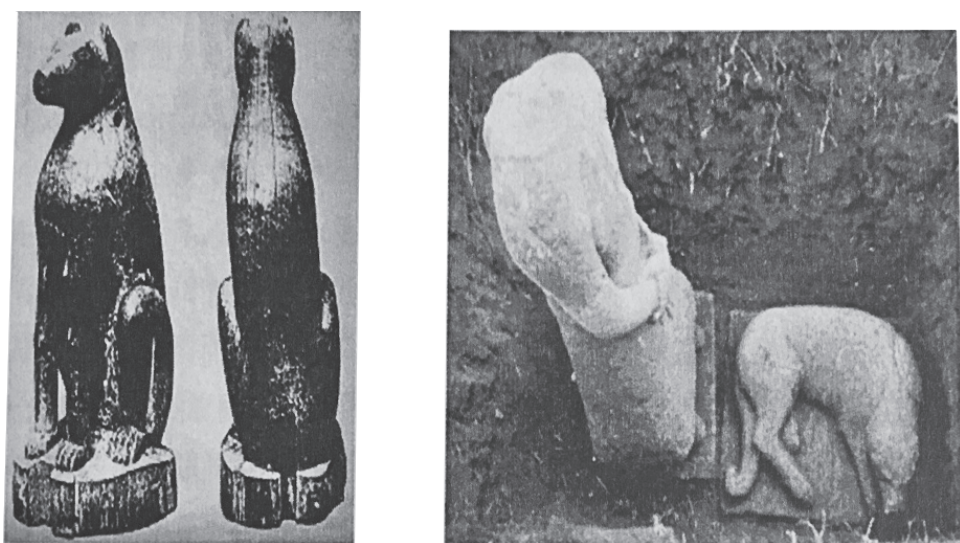


図3 祖陵 出典：梁娜「浅談契丹之犬」p. 95

の人、石犬頭部向西。(中略) 古代皇陵陵前所立石像生都是有严格的等級制度规定的，并設有專門的官员監督和管理。遼祖陵在陵丘之前陈设陳設石雕像是繼承了唐代皇陵在陵前設立石雕像墓儀的傳統。(中略) 由此可见，祖陵石犬包含了多種文化因素，它是契丹在效法唐陵墓儀制度的同時，加入了本民族傳統文化元素和情感，从而创造出具有自身特色的遼陵墓儀制度。陵前立犬的墓儀是由薩滿教的祭祀儀俗逐步演变而来的，犬之所以会受到青睞也是有其深刻的历史淵源的。契丹民族和北方其他少数民族一樣，崇信的是原始宗教——「薩滿教」。薩滿教是東北地区一種古老的原始宗教」(梁娜，二〇一〇年，九八—九九頁)。

日本通訳は以下の通り。「遼代初代皇帝及びその皇后の陵寢について、二〇〇三年の試し掘りの時に、陵前の緩やかな坂で、一尊の石人像と一尊の石犬像を發見した。石人の頭部は殘欠しており、石人は石犬のそばに立っており、おそらくこの犬を管理する役目の人物であろう。また石犬の頭が西に向いている。(中略) そもそも古代皇陵陵前立石像はすべて嚴格な制度で規定されており、また、専門の役人が監督管理をしている。遼祖陵陵丘の石彫像は唐代の陵前設立石墓儀の傳統を受け継いでいる、(中略) このように祖陵石犬は多様な文化の要素を含んでいる。契丹は隋唐陵墓儀制度を模倣すると同時に、自らの元々の民族の伝統文化や感性を加えており、それによって独自の特色を持った遼陵墓儀制度となった。陵前立犬の墓儀はシャーマニズムの祭祀儀俗から徐々に変化して来たとと言える。犬がつねに登場するのは、その深い歴史の源から生じているからだ。契丹民族および北方の他の少数民族においては、つよく信じ



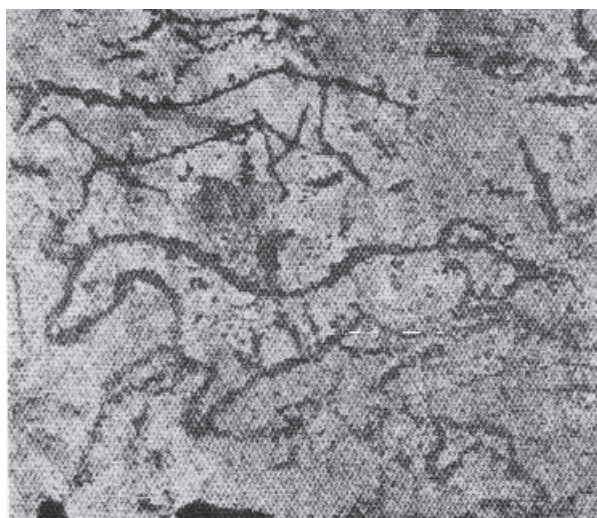


図4 克什克騰旗二八地一号墓の壁画

出典：『中国国家地質発形図書——克什克騰』p. 45

られているのは、いわゆる原始宗教——シャーマニズムである。シャーマニズムは東北地区の古い原始宗教である」。

島田は以下に述べる三種があると指摘しつつ、また城址から石狗（石犬）が発見されたと言っている。すなわち「彫刻には、その材質から彫石・籤彫・木彫の三種がある。（中略）上京・中京・慶州の城址から発見された石人・石狗など、および一九四三年私が祖州城址の発掘調査のさいに得た天女・動物文・花文・雲文などを刻した礎石や建築用石材などがある」（島田、二〇一四、一五〇頁）

いままで見てきたように、犬は契丹人の生活と精神にとって重要な役割をはたしている。犬は契丹にとっては、かけがえない存在だ。普通の狩猟の生活でも、犬は契丹人に不可欠だ。また冥界においても、鎮墓石に見られるように犬が魂を道案内しつつ、また警護をしてくれる。契丹人の遼太祖の陵墓で、石犬が石人のすぐ近くにいる事実は、梁娜の指摘するように石人は石犬の管理者を示している」と解釈できるのではないだろうか。

## 7 遼代壁画

『中国国家地質発形図書——克什克騰』ではつぎのように言っている。克什克騰とは古代契丹遊牧民族の集住地だ。そこで、岩画が豊富に残されている。岩絵の題材は多様であり、内容が豊富で、生産と生活にかかわっている。族徽、宗教、祭祀、天体星雲、人面図やトーテム崇拜などもさまざまな方面に言及されている。岩絵の多くは鹿を中心に、また日月星辰、牛馬野豚犬虎豹など動物だ。

島田正一郎は、「一般の契丹人の服装については詳しいことはわからないが、たとえば克什克騰旗二八地一号墓の壁画に見られる牧夫などによると、開襟の短衣を身に着け、腰に帯をしめて、長靴を穿つなど、きわめて活動しやすいよ



図5 牧夫と犬 出典：『契丹国・遊牧の民キタイの王朝』

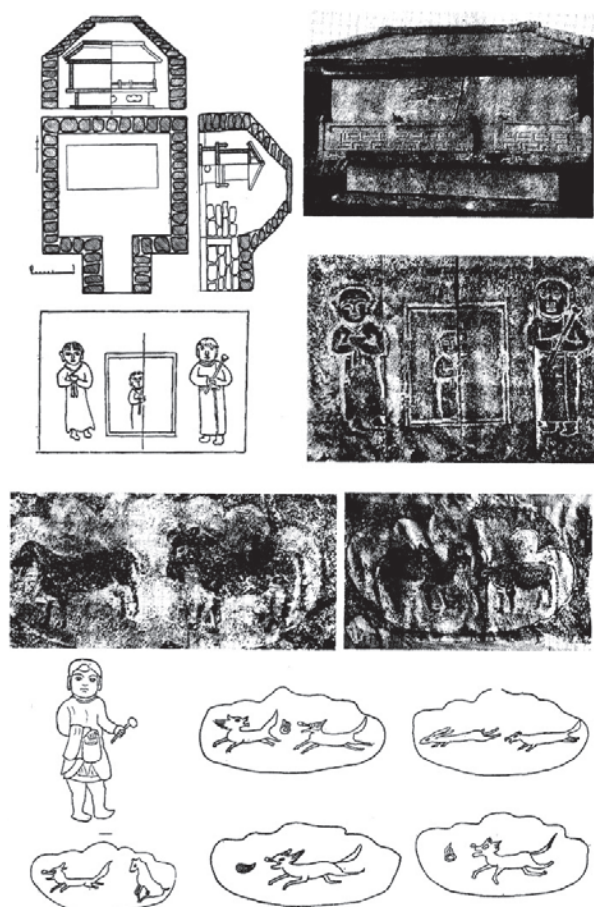


図6 錦州張杠村2号墓 出典：「遼代壁画資料」p. 182

うにしていたようである」(島田、二〇一四年、一二二頁)。

その壁画(図5)から見ると、犬も牧夫と二緒にいる。牧夫の普通の生活で、犬がいつもいるわけである。

東の「遼代壁画資料」によると、錦州張杠村二号墓(遼寧省錦州市張杠村沈家台公社)は四基の墓葬が集中して分布する。それは方形(2.7×2.5m)の単室墓で、墓道がある。そして墓室内に石棺画像石が配置されている。東面に犬と狐、西面に牛と駱駝、南面に三組の狐と兔、北面に三組の馬、羊が彫刻される。石棺の前面に二人の門衛と一侍女が表現されている(図6)(東、二〇〇七年、一四六頁)。

また、庫倫旗六号墓(内蒙古自治区通遼市)全長22mの両耳室六角形後室八角形の多室墓の壁画は墓道・天井・墓門の漆喰の上に「墨



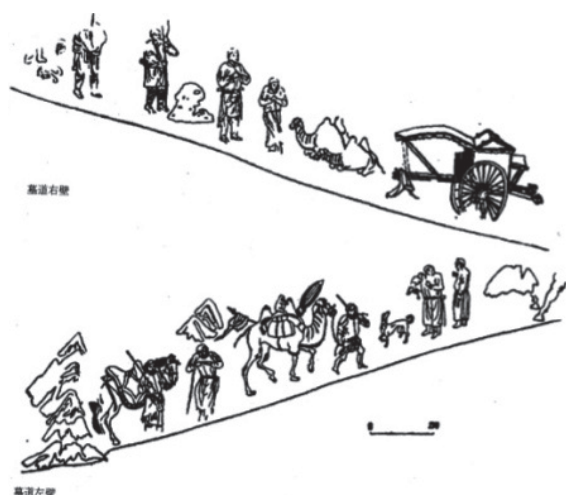


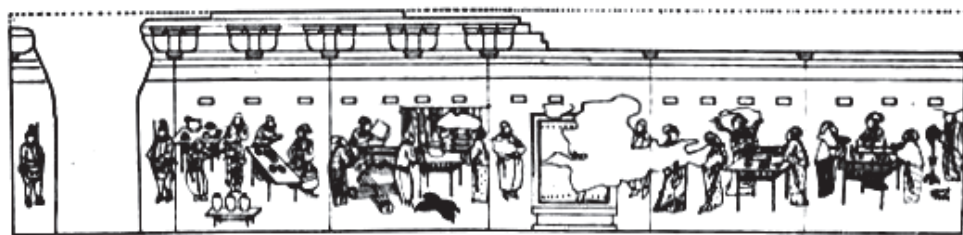
図7 人間と動物 出典：「遼代壁画資料」p. 198

線勾勒」の技法をもちいて描かれている(図7)。墓道北壁には、山岳文、牽引馬、両手を胸元であわせる姿の墓主、牽引駝駝、瘤に猿のような動物、さらに犬、鷹匠と男子人物、山岳文が墓道入口に向かって表現されている。それは墓主の出獵図と解釈されている。墓道南壁は墓道入口にむかつて車と二頭の駝駝がいる。駝駝牽引車である。対向するように杖のようなものを持つ人物がいる。北壁の人物と対比すると墓主であろう(東潮、二〇〇七年、一四七頁)。

宣化下八里M4韓師訓墓(河北省張家口市宣化区) 仿木構造の塋室墓。墓道・墓門・前室・甬道・後室からなる。前室方形、後室六角形。壁画は前室・後室にえがかれる。前室南壁にあたる墓門の両側に門吏が立つ。西壁に出行図。牽引馬、駝駝車、人物(使臣)馬で構成されている。東壁は九人の奏樂図。

北壁に門神。天井に星宿がある。後室南壁の両側に門吏、西南壁に四男一女の飲酒聞曲図、西北壁は装束「準衣装」。北壁に門が表現される。両側に各一人の人物像。東北壁には卓子のまわりに四人の婦女がいる。東南壁では欄干のある卓子に四人に婦女がいる。足下に白色花柄の犬が描かれる(図8)。韓師訓は乾統一〇年(一一一〇)一一月に卒し、天慶元年(一一一一)九月に火葬後、埋葬されている。墓室構造は近在する張世古墓(一一一七年)に類似する(東潮、二〇〇七年、一五一頁)。

東の「遼代壁画資料」を見ると、契丹人は犬を捨



後室

図8 犬が描かれる 出典：「遼代壁画資料」p. 216

て去れないようだ。墓の壁画では、犬は漢族と同様に契丹人に対して、冥界の案内者、生活に不可欠な動物として存在する。契丹人の信仰はいわゆるシャーマニズムである。シャーマンを介して、人は死んだ後の世界で生き続ける。そして犬は厄よけの霊獣だ。壁画で、いろいろな犬と人間の生活が描かれている。このように、犬は日常生活のなかで人を守っているのである。

## 結論

上述のように、遼代の契丹族はシャーマニズムという信仰が強い。また漢族と異なり、狩猟が主な生業なので、自然環境および動物との距離が近いことが以下にまとめられる特徴を示していると解釈される。

ただ契丹人にとっての犬についての考え方は、中国古代漢族と基盤を同じくしている。すなわち、「辟邪趨吉」（邪を避け、吉を生み出す）という考え方と「人間に忠実」であるという判断がある。また、古代漢族と同じように契丹人も隕石のことを犬になぞらえて、「天狗」と呼んでいた。

大きくは以上のようにまとめられるが、以下で契丹族の犬についての考え方を整理しておこう。

一つ目は犬は霊的な意味としてまとめられるものである。

（1） 古代中国の漢族とおなじく契丹族も、犬は死者を守護するために必要であるとみなしていた。生前のようにご主人を守ると考えていたのである。

（2） 契丹族は伝統的なシャーマニズムと外来の仏教の両方影響を受けていた。その信仰のもとで、犬を含む動物全般を崇拝の対象にしていた。

（3） 毎年の八月十五日は契丹族の中秋節だ。その一週間前、八月八日になると、祭祀のために国主は白犬を殺す習俗がある。これは、犬を犠牲にすることによって、犬が霊魂になって鬼神から人間を守るようにする年中行事である。犬の犠牲は古代漢族でもみ

られた。

(4) 犬は人間に対して重要な役割をはたしている。遼代の皇帝陵の鎮墓石に見られるようにそこに犬がいる。「石犬」が人間のすぐ近くにいたことは、契丹人と犬との強い関係性を示している。「石犬」は主人を守る能力を持っていると信じられていた。古代漢族でも犠牲にして埋葬した犬は主人を守ると信じられていた。

二つ目は実用性（狩猟・遊牧）からまとめられるものである。

(1) 契丹族は遊牧民族なので、通常の狩猟の生活においても犬は不可欠だ。猟犬と人間との関係は遊牧民族特有な文化ともいえる。犬は狩猟のために特有の能力を期待されたようである。

(2) 「遼代壁画」も多くの動物の姿を描いていた。そこに犬と人間の日常生活が表現されており、犬が契丹人にとって極めて大切な動物であることが分かる。

(3) これは現代の遊牧においてもそうだが、遼代において、すでに犬は牧群をコントロールする役割をもっていた。

このように犬は霊的な意味と実用性の特徴があるとまとめられるだろう。古代漢民族も遼代の契丹人も、犬は不可欠な生き物であり、同時に霊物でもある。とくに契丹人にとっては、犬についての一年間の祭祀は大切な年中行事でもあった。

#### 参考文献

##### 日本文献（五十音）

- 東潮「遼代壁画資料」、徳島大学総合科学部、『人文社会文化研究』、巻一四、二〇〇七年  
池嶋洋次『契丹「遼」と10-12世紀の東部ユーラシア』、勉誠出版、二〇一三年  
今井秀周「遼祭天地について」、『東海女子大学紀要』、25、A1-A9、東海女子大学、二〇〇六年

袁行霈 ほか著、原田信訳『中国の文明6・世界帝国としての文明(下)』、潮出版社、二〇一五年

島田正郎『遼史』、明德出版社、一九七五年

島田正郎『契丹国・遼の民キタイの王朝』、東方書店、二〇一四年

潘小寧『中国古代における犬と人間との関係―比較文化的視点から―』、『日本生活文化史』、二〇一七年

村上正二『遼民族国家・元』、講談社、一九七七年

山根弓果『遼諸皇帝の仏教受容と祭天地』、『龍谷大学大学院文学研究科紀要』、33、龍谷大学大学院文学研究科紀要編集委員会、二〇一一年

吉田一彦『契丹(遼)の仏教をたずねて―二〇一二年度の調査から―』、『歴史文化遺産を考えるⅠ』、人間文化研究所年報(8)、二〇一三年

## 中国文献(ピンイン)

蓋山林『大岩画・犬・犬祭』、『北方文物』、一九八九年第三期

齊建芝『遼代契丹族薩滿教研究』、西北民族大学、修士論文、二〇一七年

梁娜『浅談契丹之犬』、『内蒙古文物考古』、吉林大学边疆考古研究中心、二〇一〇年第二期

夏宇旭『契丹猎犬述略』、『蘭台世界』、第三六期、遼寧省档案学会、二〇一三年

『中国国家地質発形図書―克什克騰』、中華地図、中華地図学社、二〇〇七年

## 歴史的な史料(時代順)

〔漢〕司馬遷『史記』、中華書局、一九八二年第二版(訳注本、吉田賢抗訳注、明治書院、一九九五年)

〔宋〕葉隆礼撰『契丹国志』、国学文庫、一九三三年

〔元〕脱脱等『遼史』、中華書局、一九七四年